

広島・あいりちゃん事件から3年、父の手に遺品戻る

広島市安芸区で2005年11月、下校途中に殺害された小学1年生木下あいりちゃん(当時7歳)が身につけていた通学帽やノート、ドリルなど計60点の遺品が、広島高検から遺族に返却された。あいりちゃんの父、建一さん(41)は、約3年ぶりに戻った品々を手を、「あいりの息づかいが感じられる」と、まな娘への思い出を重ね合わせた。

遺品は、公判で必要になった時に備え、検察側が保管していたが、7月31日に広島高裁で控訴審が結審したため、戻された。

「どうとく、こくご、さんすう.....」。連絡帳には、事件当日の11月22日の時間割が丁寧な字で記され、担任の先生にももらったらしい「花まる」が付いていた。ノート類を一つずつ手に取った建一さんは「机の上にノートを広げて勉強していた姿を思い出す。将来が楽しみだった」と慈しむように語った。

あいりちゃんは事件の約4か月前に引っ越してきたため、薄いグレーの通学帽はまだ新しく、建一さんは「一緒に制服を買いに行った時を思い出した」。

ただ、漢字ドリルを手にした時は、「事件の1~2週間前、『漢字を教えて』と言われたが、辞書で調べなさいと厳しく言った。もう少し優しくしていれば」と、ちょっと後悔した表情も見せた。

あいりちゃんを殺害したとして、殺人罪などに問われ、1審・広島地裁で無期懲役判決を受けたペルー国籍のホセマヌエル・トレス・ヤギ被告(36)の控訴審判決は12月9日。妻の買ったお守りを見やりながら、建一さんは「絶対許せない」と語気を強め、「遺族にとっては極刑しかない」と語った。

(2008年8月3日 読売新聞)



通学帽(奥)や連絡帳、お守り、漢字ドリルなど木下あいりちゃんの遺品(1日午後、広島県海田町で) = 宇那木健一撮影